シンポジウム 16：つなげる・つづける食支援

～食支援の地域展開方法模索する～

演題名	医療施設からの食支援の地域展開 ～　つながりを持つための地域多職種連携　～

概要

超高齢社会を向え、すべての高齢者が家族と社会のつながりの中で生涯にわたり生活を楽しむことのできる社会システムの構築を目指すためにも、切れ目のない医療提供（入院時から地域ケア）を支える在宅医療支援を個別性や地域生活の視点を重視した方法によって提供する体制の確保が求められている。その生活支援をする上での３大介護要素として食事、排泄、入浴があげられている。特に食支援はあらゆる生活指導や医学的介入の基盤にもなっている。独立行政法人国立長寿医療研究センター（以下：当センター）も含め、様々な医療機関・介護施設などでは栄養サポートチーム（ＮＳＴ）などのチーム医療（活動）を中心に栄養管理を積極的にサポートして疾患の治療に大きく貢献している。最近では、その活動が各施設内のみではなく、地域と連携したチーム活動の必要性に注目が集まり、その実施に向けて社会的システムの構築の必要性が急務の課題となり強く要望されている。しかし、実際には当センターでも数年前までは、地域での在宅医療支援としての栄養管理の状況は、まだまだ未知数であり十分な情報収集は出来ていない状況にあった。また、医療機関では在院日数の短縮傾向が強くなり、治療後十分な栄養状態の改善がされないままでの退院が余儀なくされている。退院までに十分な説明・指導やその後の支援の連携が準備されていない場合、退院後の栄養管理がより一層難しい状態になっていることは想像するところである。そのような中、当センターでは在宅栄養支援の一環として訪問管理栄養士との連携や退院時の栄養食事指導で調理実習を実施、終末期の在宅支援として経口摂取維持・改善のための個別対応食の実践などを始めている。また、昨年の本学会のシンポジウムで活動報告をした、在宅栄養支援の和・愛知との連携により、様々な職種・業種の方々と交流することで相互理解が深まり、食支援の点から面への展開が現実可能となりつつある。その活動の中では、当センターの在宅栄養支援の実例検討会や訪問栄養指導の実務交流研修などの研修会を開催し、在宅栄養支援の関連スタッフの人材育成のためのシステム構築に向けた取り組みを始めたので紹介する。